宗像

毎月一日発行
定価 一年 送料共500円
発行所
宗像大社社務本局
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊26番

辰年と龍

序

昭和三十九年は、甲の辰の年である。そして東京オリンピックの年でもある。明治十三年・廿五年・卅七年・大正五年・昭和三年・十五年・廿七年生れの人は満歳で十二の倍数の年令となり、中でも明治三十七年生れの人は還暦を迎える訳である。辰年の人は、概して敗けず嫌いで威勢の良い人が多いと云われるが、それが良い点でもあり又損な点でもある。龍頭蛇尾と云うことわざもあるからゆめゆめ油断なく、目出度い正月を一年間保ちたいものである。

辰は十二支の第五位に位し、方角では東南東、月では三月に、時刻では五ツ時即ち今の午前八時に当る。辰の字は、支那ではもと辰と書き、これを正字とする。説文と云う支那の辞書には、辰は震で三月陽気動き雷電振いて民の農する時なりと云い、釈名と云う辞書には、辰は伸で万物皆伸び出づる時なりとある。もと日月星の運行を指す語で、転じて時、朝、星を云う。

辰は、本来龍ではないが、十二支の動物を配した時龍に配せられたので辰即ち龍となってしまったのである。

龍と云う動物

龍は、もと支那で興った想像上の動物で、四霊或は四神と称した麟・鳳・亀・龍（或は青龍、朱雀・白虎・玄武）の内の一で、方角では北を護る霊神とせられた。「説文」には、魚虫等の長で幽明細大長短自由にして、春は天に登り秋は淵に潜むと見える。又その形は、大蛇に似て背に八十一の鱗あり、四足に各五本の指爪、頭に二本の角を有し、面長く耳あり、口辺に長鬚が生え、首に五色の玉をもつと云う。

然し、龍と呼ばれるものは生物学上実際に過去に生存したもので、中生代（西暦前二億年前から七千万年前迄）と云う時代に、動物では爬蟲類、植物ではシダ類が大いに栄え、爬蟲類は恐龍となって地球上を占領した。恐龍は種類が多く、陸には暴君龍・雷龍・角龍等、空には翼手龍、海には首長龍や魚龍が栄えた。中生代末には衰えてしまうが、大洋州の島には未だ生残った龍が保護されていると云う。

けれども、この時代にはまだ人間の先祖は現われず、これら実存した竜の記憶をもって、想像上の龍を作り上げたのでない事は明らかである。

これは、支那に於て作り上げられた霊獣であって、そのイメージは、恐らく雲であり、雨風を司る農民の生活に結びついた霊獣と考えられたのであろう。

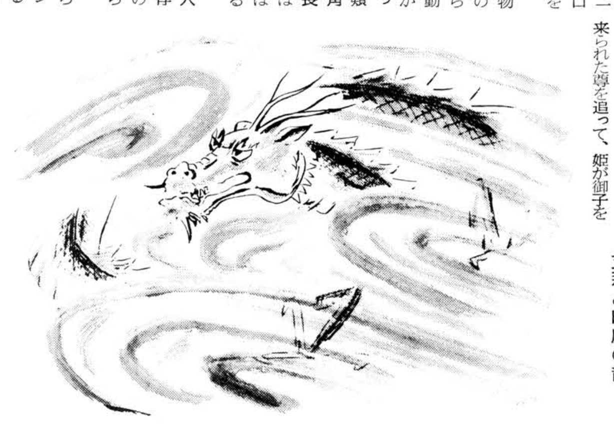
我国に渡来した龍

日本書紀巻の第二（神代下）に、海宮遊行の章と呼ばれる神話がある。これは、有名な海幸・山幸の話であるが、その後日譚とも云うべき所に、山幸彦である弟の彦火々出見尊（日向三代の第二代目の尊）が、失くした兄の火闌降命の釣鈎を求めて海神の宮へ行かれ、鈎を得て、海神の娘の豊玉姫と結婚されるが、三年居て帰って来られた尊を追って、姫が御子を産む為に来られるが、海浜の産屋で御子を生まれる時に龍となられたと云う。即ち「豊玉姫方産化ニ生龍ニ」と見える。これが、我国の書物に見える最初の龍であるから、恐らくこれ以前に既に龍が渡って来て居った事になろう。

又、同じ日本書紀巻の第十九、欽明天皇七年秋七月の条には、倭の国の良馬を称して「鴻のごと驚り龍のごと翥ぶ」と見えるし、更に、我国最古の歌集萬葉集には、巻の五に「龍の馬」（八〇六・八〇八）と見えて駿馬を龍に譬えて居るのが見られる。

古事記は、太安萬侶が和銅五年に撰上したのであるが、その序文に安萬侶は、漢文で「潜龍」と云う語を用いて居る。

斯様にして、我国の古典にも既に龍が見えるのであるが、もう一度こゝで支那と印度の龍を見る事にしたい。



支那と印度の龍

初めに、龍は支那で考えられた想像上の霊獣であると述べたが、実は印度にも龍が居たらしい。仏法守護の八部衆と云うのがあるが、その中に龍衆と称する所謂八大龍王があって、支那を経て経典と共に我国に来て居る。又八部衆の中に天衆があるが、その一に水天があり、大海の龍にして諸龍王の盟主と云う。この他に水月観音や弁才天等も龍形を為し、又仏の中には他にも龍の字のつく仏があるが、果してこれらの龍が印度で生れたのか、又支那を通って日本に来る間に龍の姿に変身したのか、その辺は尚次の辰年迄に仏様に聞いて見たいものと思う。

支那の龍にも色々な龍があるが、種類だけ挙げて置こう。蛟龍・白蛟・虬龍・螭龍・応龍・蜃・龍鯉等々……

我国の伝説中の龍

1　龍宮と乙姫様　これはもう云う迄もなく浦島太郎の話である。この話の節を述べるのは略するが、この説話が前に述べた日本書紀の海幸・山幸の話と似ている事は、誰にでもすぐ気のつくことである。日本書紀では、海神の宮と書き龍宮では無く、豊玉姫と書いて乙姫様では無いが、比較神話学の上から見れば同列に属すると云えよう。

2　龍燈伝説　これは神社や寺の老松・古杉の梢に、燈火の現れるもので、多くは海の近くに見られ、我国では龍神が燈を献ずると信じられて龍燈と称した。西洋ではセント・エルモの火、印度では文殊燈・菩薩燈、支那では天燈・仙燈等と呼ぶが、現れる理由についても種々説があり、航海の為の燈台の役目をする灯と云い、又空中放電説、蜃気楼説等があるが、今は問わない。

3　龍穴伝説　多くは龍の住む穴があり、雨乞いして霊験のある信仰譚であるが、中には雨乞いに関係の無い霊験譚もある。龍穴伝説の存した神社には、

(イ)諏訪神社（長野県諏訪市）
(ロ)龍穴神社（奈良県宇陀郡室生）
(ハ)八坂神社（京都市祇園）
(ニ)江島神社（神奈川県江ノ島）
(ホ)宗像神社（福岡県宗像郡玄海町）

等がある。

4　その他、これらの他に、まだ潮干珠、潮満珠、竜宮女房、竜宮童子、竜女伝説などの伝説が多いが、今は省く。

龍と日本人の信仰

神社に龍王神社、龍宮神社など龍を冠した神社が幾社か存するのであるが、御祭神は闇龗神・高龗神、或は豊玉姫命、或は水分神等、すべて水の神である。又龍の字を冠せぬ神社でも、海の神を祀った神社、湖水のほとりの神社のうちには龍形を以て祭神の姿を表わしたり、霊験譚を伝へるものが非常に多い。龍そのものは、支那から輸入されたものであるが、日本人は、農業と漁業によって生活する民族であって、何れにしても水と深い関係を持たずに生活は成り立たなかったので、水を司る神霊を畏み崇び、その加護により生活の平安を祈ったのである。農民は雨の神として、湖水、淵等の近くに住む者はそれらの主として、漁民は海の支配神として、夫々水の神を祀った。処が大陸から入って来た支那の陰陽道と云う易占暦法祈祷を主とする術は、祈雨の祈祷を行うときに五色の龍を封じ込めてこれを為したり、仏教でも密教の雨乞祈祷には龍王を招いて行ったりしたものであるから、これが我国古来の水の神の信仰と結びつく結果を生じたと思われる。

もとく我国の神でも、出雲の八俣の大蛇や、大和国の三輪の神等、力の強い神々は蛇の形で表わされた信仰は古くから存したので、陰陽道や仏教の龍が結びつき、広まり易い素地はあったと云えよう。日本三弁天と俗称される宮島の厳島神社・琵琶湖の竹生神社・神奈川県江ノ島の江島神社には、夫々龍神に関する信仰が結びついているのもその名残である。

そうでないものもあるが、竜神は、多く女性の、それも美麗な女性として表現されるのが多い。

由来、信仰とは移りゆくものである。我々はその表面の現象のみに捉われて迷信に陥いることなく、その底を流れる正しい民族の信仰に立って、日本人の心を心としてゆきたいものである。

（神社本庁主事　吉田　著）

謹賀新年

宗像大社御用達
神輿 祭具 装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話(37)八八六九番
振替口座京都一五八九一番

阿蒙少言

元旦、はためく国旗の下、国歌を斉唱した少年の日の厳粛な思い出は忘れられない。君が代は大鵬が優勝した時歌う歌であります と、小学生が答えて、質問した先生を慨嘆させた。この辺で赤旗を捨てて国旗に、革命歌を返上して君が代に還ろうではないか○雪の季節になると赤穂四十七士の壮挙が想われる。義士は名を求めたのではないが、義士たる道を歩まねばならなかった男子処世の苦衷が胸を打つ。生きねばならぬ悲願成就のために、死なねばならぬ士道の意気地○「君は何の目的で大学にいったのか」学問をするために、嘘を言うな。「君は何の目的でこの会社に就職するのか」苦労して育ててくれた母を喜こばすために、ご名答○敢えて墨子の兼愛説を学ぶまでもない。利他主義から出発しなければ利己主義は完成を見ない。近くの花好きの奥さんに庭隅の一輪を贈り、酒好きの主人公にお歳暮の一瓶を頒ち、近所近辺は太平無事、我が家の春も楽しい○買物の帰り路、日本語のすこぶるお上手な夫人に老妻がつかまって、長い間の立ち話。老妻よ早く脱出せよ、風邪をひかないうちに。と念じて、待てど日本語は簡単に終らない。漢字の制限よりも日本語を制限してもらいたいと思う一時がある○貧しい家庭に育った子供、本人の罪ではない。家柄だ、金持だと自慢しても碌な子供は製造しないではないか。家柄や財産は娘の嫁入り条件だけではない。雲消霧散、やがて亡びゆくもの。そして新しいものが抬頭する。これが天神の教えた道。家格の人生より、愛と道理の人生に生きたいもの。誇り高き家門の継承者以って如何となす○言いたきを言わぬがために水垢離

（白雲）

1964　交通安全宗像大社の御神徳をたたえ奉りて……（順不同）

謹しんで新年の御祝詞を申し上げます

福岡トヨタ自動車株式会社
取締役社長 金子道雄
福岡市渡辺通り五丁目六四ノ四
電話（代表）㊻二四三五・三三二一番

福岡トヨペット株式会社
取締役社長 松田正義
福岡市比恵九二番地
電話（代表）㊿〇二三一番

福岡日産自動車株式会社
取締役社長 安藤信夫
福岡市薬院大通り二丁目四三ノ一
電話 ㊺四五六一～九番

北九州日産モーター株式会社
代表取締役 松本虎次郎
福岡市比恵屋敷町三三番地
電話（代表）㊿一八三一番

福岡いすず自動車株式会社
取締役社長 渡辺藤吉
福岡市比恵新町一二一番地
電話 ㊿四六三一～七番

株式会社マツダオート福岡
取締役社長 吉田弘
福岡市比恵新町一八番地
電話（代表）㊿六〇三一番

福岡マツダ販売株式会社
取締役社長 吉田千治
福岡市西堅粕二丁目国道筋
電話 ㊿二七三一～六番

株式会社梁瀬福岡支店
取締役支店長 岩永政定
福岡市平尾新川町三六ノ一番地
電話 ㊺一六三五～九番

福岡日野自動車株式会社
取締役社長 植竹陽介
福岡市堅粕御塔後一三九五番地
電話（代表）㊿〇八三一番

九州ふそう自動車株式会社
取締役社長 橋本千敏
福岡市薬院大通り二丁目七二番地
電話代表 ㊹三六三六番

論説　一名禽の産卵

禽獣は啼く。啼くことが生存の必須の条件であるから啼く。鳴声をあげると、その正体が知られる。知ってもらいたいのであろうが、知られて悪い場合も少なくない。

啼かねは正体は知れない。往昔の傑物によって起された所謂名家の保存には、その忠実な側近の深い配慮と絶えざる努力とがあって、不肖の児孫の正体を知られぬための苦心が重ねられて、鳴かせず飛ばせず家門の栄誉を維持し、権勢の崩壊を支えてきた例は少なくない。その無能の名家、暗愚の馬鹿殿様も優秀なる人物という虚構の影像を残している場合が、極めて多いことが想察される。

名禽必ずしも秀卵を産まない。育雛のベテランでもない。然し人類以外の動物は、多くの例に見るところ、血統の自然性に優劣の後身が、決定づけられているかに思える。系譜がやかましく吟味され、逸品は優れた親の血をひくとされている。人間界の名禽とその産卵を探索するとき、そうは見られない。

世上に称えられる名家の発生に遡って考えてみると、藤原氏の鎌足、蜂須賀家の小六、いづれも名家としての創立には偉傑の始祖の出現を語っている。それ以前の親縁は杳として怪しい来歴だが、名家になって以後、相先の格別の血統が必然的の結果をもたらしたのである。名のみで実のともなわぬ祖先の糟粕を嘗め、伝承の社会的地位に偏安し、特権意識を誇示する名禽の児孫たる鈍鳥が残す汚点である。傑物暗愚の交錯する人間界の現実は、敢えてメンデルの遺伝学説を俟つまでもなく、自然に展開される蘭霊神の造作かも知れない。

史上の英傑は良き家柄は創ったが、必ずしも良き児孫を遺さなかった。名禽は名器を育てる力量はある。名器たる資質を発見する叡智もある。自己の血縁に秀卵を見ずとも、また産まなくとも、名器を育てて欲しいものである。

駿馬の天狗が源九郎義経を産んだのではない。源家一統の執念が優れた資質をもつ牛若丸を育て上げる力となって凝結し、屋島壇の浦の快挙となって、駿馬の奥山に一陽来復の花の便りを伝えたのである。佐倉宗五郎は名家の父祖を嘆くに代えて、家族の犠牲を自身の悲願とした心意気は、真に一道の興隆を希う者ではなければ出来まい。暗愚な児孫を偏愛し家門伝承への盲執に得たる貴重な秘法を、門下に伝える者の責務は、敷衍の一念に奔走したのである。名臣が血肉の私情を捨て恩愛の羈絆を断って、生涯を賭して体得した

私の初夢
―未来の初詣で―

宗像大社氏子会長　庄村喜右ヱ門

齢七十に近い私が此の様な事を書くのは何ともおこがましい。

一富士、二鷹、三茄子とは初夢の瑞祥。初夢の吉祥になるかどうか、まあ、モダン爺さんの絵空事とでもお笑い捨て下さらば幸甚である。

私は車に乗っているのだ。腕時計は一月三日、午前八時半を指している。窓外を眺めると冬枯れの茅の上に、冬の太陽は柔かい日射しを投げかけている。大分冷え込んでいるに違いない、車窓が時々曇る。運転手は息子の嫁の花子である。助手席には小学校六年の孫が乗っている。

車にはハンドルがない。スイッチ板が並んでいるだけである。花子は時々スイッチを押し変える。車はそれでスイスイ走るのだから、ギア時代の車と比べると隔世の感がある。

福間の自宅をいつ出たかは記憶にない。しかし、車はもう白水峠にさし掛っている。峠から車は左に向きを変えた。銀色に輝く大きな鳥居が見える。宗像大社参拝専用道路だ。巾百米もあろうか、一車線各に緑地帯で区切られている。この道路は、全国のモデル道路の一つに指定されているのだそうだ。車を自動操縦装置に切り変えておけば、道路自体が路面に応じて巧みにコントロールしてくれる。花子はもう孫と一緒に車のカラーテレビに熱中している。

時速二百粁は出ているに違いない。窓外の杉林、松林は一瞬の内に後へ飛び去り、あっと云う間に宗像大社の金色の鳥居が見え出した。ここで花子が又ボタンを押し出した。

そうだ、宗像大社と云えば、昔私が良くお参りした事があった。今日は三日、未だ初詣でをしていない私に、息子が親孝行をして呉れて、態々車に乗せてくれたんだった。そうだ、やっと想い出した。私は自分の脳細胞が働き始めた事を覚えた。

車が前にも後にも列をなしている。それにしても境内になんと立派な施設が出来た事か、車のお祓いをする建物がある。

前の車に続いて緩いスロープを登ると祓い殿入口がある。明るいクリーム色のトンネルを思わせる。トンネルの上部から白い霧状の液体が噴射されている。くぐり抜けると車は綺麗に洗車されている。

やがて屋内体育館を思わせる大きな場所に出た。天井から床まで一面深い蒼い色で神秘的な感じである。中央に白木造りの祭壇が設けられている。花子に抱きかかえられて車から降ろされた。用意されているソファ状の椅子に腰かけると自動的に前に動く、祭壇の前で止った。花子も孫も、他の参拝者も皆ゆったりと椅子に腰かけている。神前でこんなに寛ろいだ姿勢でいるのは何か後めたい感じになる。これは私の年の所為かもしれない。寒くない。何か空気が旨い。高い山のそれの味がする。後から花子から説明を聞いてわかった事なのだが、イオン交換何とか法で人間に最適な空気を送り込む装置がしてあるのだそうだ。

やがて雅楽の音がして来る。しかし、聞きなれたメロディではない。何か眠りに誘い込まれる様な心の安らぎを覚える様な静かな曲だ。こんなに多数の参拝者がいるのに唯一人として声を発する者がいない。私は深夜一人で神社に参拝している様な錯覚に襲われた。

その内に十名余りの神職が一糸乱れず祝詞を唱和した。祝詞が終ると参拝者の前列の者から一人づつ椅子のまま神職の前に進む。椅子が自動的に動くから仕方がない。神職がおもむろに口を開いた。

「あなたは心清くする様努力しますか」「努力します」

「あなたは交通安全を守りますか」「守ります」「では、祓室の方へどうぞ」

自動椅子は参拝者を別棟の祓室へ案内する。緋の袴を着けた巫女さんと医者の格好をした者が、我々の頭にパーマ屋のおかま状の物をかぶせ、手足を鉄製の大きな洗濯バサミの様なもので止めた。傍のスイッチが入れられると急に睡魔がおそってくる。どの位時間が経ったかわからない。目を覚ますと先程の巫子さんがにこにこ笑っている。

「お祓いが済みました」

私には何が何だか判らないが、妙に脳裏に深くこびり付いて離れないものがある。あの祭壇での一問一答である。

「あなたは交通安全を守りますか」「守ります」

あの祓殿の祓室は現代精神医学と心理学の総力を結集して作られたカウンセリングセンターなのだそうだ。良く理解できないが、宗教と科学がミックスされているのだそうだ。神社がこれ程の変革をするとは思いもかけなかった。

そうこうしている内に自動椅子は前の所に戻った。私は花子に尋ねた。

「私が昔奉仕した御殿はどうなっているかね」

花子は私の気持を察して気軽に車を廻してくれた。祓殿を出て、二、三分もすると昔懐しい社殿の屋根が見えて来た。しかし、現在では特別の申込みをしない限りそこに坐らせてもらえないそうだ。拝殿の前には近代的壮麗な新拝殿が出来ているからだ。私の脳裏に昔の想い出が甦がえった。放生会に奉仕してしびれが切れて立てなかった事を……

――何か耳もとで大きな声がする。あゝ婆さんの声だ。私は飛び起きた。しびれの想い出の原因は、起きない私に業をにやした婆さんが蒲団をまくって私の足を冷房した事にあったのだ。

宗像談話室　あさはかな話

枕草子二十四段上に

「物羨みし、身のうへ歎き、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らせぬをば怨じ譏り、又わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のように他人（ことひと）にも語りしらべいふも、いとにくし」

とある。平安朝の昔、清女が鋭く喝破しているこの言葉が面白い。ここにあげられているような人は今もいる。そして、今ここにこれを書いている自分だって同じ事じゃないかとも思う。

専ら他人の事ばかりが気にかかり、それを吹聴して歩く。そんな事が客観的な自分を貧しくし、見すぼらしくしていることに気が付かない人は哀れである。

「物言へば唇寒し――」
「人のふり見て――」

この対照的な俚諺は昔からの常識として誰でもが知っている。だが最も常識的なこの諺が実際には仲々難しいことになっているらしい。

「こうなんですってね、ああなんですってね、ヒミツですけど」
「マア、ホントウ？チィットモシラナカッタワァ、アタシ」

こんな会話が如何に無意味に繰返されていることか。そしてその余計なお喋言りが伝播されて行くにつれて、Aはいつの間にかBの事実になり、それが繰返されて行くうちに針小棒大になり、もしくはまるきり裏返しにされて行くことが多い。

世間は地域社会のアナウンサーをヒンシュクしているくせに、その人の言動には極めて興味を持ちたがる。その内容が無責任だからである。喋言り廻る者も聞く者もお互いに無責任の限りをつくして生活しているのが現代世相の一断面にさえなっている。

こう見てくると、平安朝の昔に清女がのべた事は今でもちっとも変っていないことになる。いや、それどころか、ますます生成発展して行く傾向がある。「いとにくし」と言った言葉は「心にくし」という意味ではなくて、憎悪軽蔑すべきことだと断じている意味である。だが一部の人々はこれが何としてもやめられないものらしい。誠に浅はかな話である。

浅はかな話も刺身のツマのように少しはいい。少しはいいが度を越すといやらしい。汚い。

此の間剣道練習がすんだ時に、少年たちを前にしてこう話した

「人間は、ほかに誰もいない所で独りぼっちになった時に、どのようにするか考えたことがありますか。昔の人は〃小人閑居して不善をなす〃と言っている。君たちみんな、たった一人になった時に一体どんな心持ちになるだろう。（誰も声なし）

そんな時には、自分は誰も見ていなくても、恥かしくない生き方をしているかどうか考えた方がいい。沢山の人が暮しているから、一人の人でも〃人間〃というのだとすれば、一人きりでいる時でも立派な生き方をしなければならないと思う。一人の心になって考えることは何時でも出来る。一人っきりの時には、自慢も高慢もハッタリも、すべて必要ない。生きて行くためには一人の心、正しい心を持ち続けることが大切です。一人きりでも自分を正しい自分にしておくことができるかどうか、みんなで考えよう。」

話しているうちに、これは自分に言い聞かせていることだな、と思った。

ともあれ清女がいうように、「金棒」をひいて歩く人生だけは御免蒙りたいものである。正月早々からの憎まれ口、真っ平御免候え。

第三十三回　宗像大社献詠歌会詠草

十二月一日　於社務所詠草到着順

大濠　広田三都子
神詣で初孫の幸を祈りつゝ御くじの紙を神木に結ぶ

〃　江崎　琴子
空たかく夕闇せまる大濠に白鳥白く浮きて遊べる

香椎　織田　椽雨
木の丸の殿跡の宮にすめみこの御歌しぬばゆ黄葉の秋
（恵蘇八幡宮に詣でて）

村山田　吉田佐一郎
刈り時期の近き稲田もこがね色穂垂り重げに稔りうれしき

福間　井原　元彦
すりこ木のやうな人生いそがしくぐりぐり廻り身をすりへらす

福岡　前田裔之助
なけなしの中より求めし此の茶器のこはれて淋し秋のひととき

宮田　片山　一
うちつけに航海にゐし吾子帰る無心に胡麻をたばねし朝

神湊　隣船　俊
汽車の窓紅葉の錦笠置山畏れ多しも時の帝は

福岡　高橋　昇
老衰とかこち老呆と笑ふ人もあれ吾れ老熟といふ神のまにまに

京都　鈴木日出年
たまゆらに雨ふりいそぐ高原の野草つぶさにぬれてありけり

陵厳寺　真鍋　万三
秋深み葉はへんぺんとちりて行くわびしき空に柿二つ三つ

吉武　高山徳七郎
これはこれはとばかりげに壮観の八所の紅葉社殿に映えて

津屋崎　麦野　時雄
秋晴るゝ日曜の朝の乗客の装ひも気もかるがると走る

吉留　高山　功子
土足にて上る講堂の荒延地下足袋を気にして投票をすます

田島　小野　迪夫
沖ノ島夜寒の風の鳴るなべに目つむりて遠き子らをし懐ふ

勝浦浜　永島　文子
見渡せば四方の山辺に映ゆる紅葉去年の如くに母の思ひ出

内浦　長畑　房江
冬に向う足萎えの夢百貨店にラクダ色のマフラー選びき

村山田　金丸　柳蔵
草千里阿蘇高原のすゝきが原白き穂の揺れ牛群遊ぶ

人吉　久羽　博史
身に負へる重き悩みを相かくし逢えば明るくひと日語らふ

田島　深田　嘉子
ミシン踏む晩秋の夜夫のくむ茶は暖くしばし静寂に

戸畑　伊規須ゆき
大友方に敗れし氏貞ここに籠り再起計りし大島城の跡（大島にて）

宮田　片山　朔子
病み易き身を秋陽に曝し仰ぐ空恵慕さえぎりて淡き雲ゆく

東郷　小野角次郎
牛を牽く出来秋の秋田の面には小犬幼児遊ぶ夕暮

〃　小野　花居
孫守りて看護の日々の明け暮れに山茶花にほふ頃となりけり

武丸　立石　昇
朝まだき雨戸をくればをちこちに稲扱ぎの音今日も聞え来

〃　立石ろせの
蔭膳に無事をいのりて遠く住む吾子の誕生を祝ひてやりぬ

吉留　山下しずえ
落葉して雑木林はうら悲し木の間がくれの日射しを浴びて

吉田　占部由久江
歌集「老い夫」繙くたびにせつせつの君のまごころに胸をうたるゝ

深田　中野　節子
深みゆく秋のうす陽に草叢のパンの袋に蟻の群れをり

江口　辻野　開造
我が生をさゝえる力ありと思ひ心をこめて洗ふ総義歯

勝浦　永島　計七
干柿を吊せし椽の日向にて孫と戯れつつ手をさしのべし

吉武　原田　リノ
見るかぎりネオンに映えし秋の夜の洞海湾を見下して立つ

戸畑　田中ハツネ
国体に花一杯の防長路コスモスの群秋風にゆらぐ

門司　永島　哲夫
新調のガスストーブに火を入れて子等楽しげに父吾を呼ぶ

東郷　藤崎　辰子
こごみたる母に竹杖拾いやり小さき肩に手をそへて行く

南郷　井上陽之助
みのりたる稲穂にちなむ訓あり「能あるたか」にならへ子らみな

宗像四郎氏貞（十一）

山下半可　作
福田長庵　画

曽我の裔（二）

実は隆家は去年の八月二十七日付を以て主君大内義隆の近習小座敷衆である貫隆仲、岡部隆景らの連名による文書を受取っている。

その文書で彼は宗像大宮司氏男と現在黒川の庄にいる鍋寿丸の所領について、両者の誤解による上納米の差配を委任されていた。宗像領内の問題について主君の信頼がこれ程篤いことを、隆家は有難い事に思っていた。

陶の文書を深くせんさくしないでも、彼の心は決っていた。宗像家が名族を誇り、宗像宮を中心として飽く迄も結束するのであれば、自分も河津三郎祐泰以来の家柄を堅持する為に献身する迄、というのが彼の心境であった。

河津家はその昔、伊豆の国の地頭職伊東祐親を先祖としている。その嫡男河津三郎祐泰は工藤祐経に謀殺され、後に河津三郎の遺子曽我の十郎祐成、五郎時致が首尾よく仇を討った事は普く知られている。三郎の舎弟九郎祐清がそのあとを継ぎ、その子狩野四郎祐光は建久八年三月に頼朝に臣従し、爾来河津姓を再び名乗って連綿と続いた家柄である。建治二年十月に蒙古の兵船が夥しく筑前の海辺に漂着した時に、四世の子右衛門尉祐重が鎌倉幕府の軍監として西下して「鎮西之監察職」となった。その子の孫次郎貞重の代になって長州から始めて筑前に下り、粕屋郡追門河内七百町を賜って居住した。高鳥居の小仲庄に館を建築する時に二つの霊石があったので、貞重はこれを先祖の曽我兄弟の霊社として祭った。奇しくもその年永仁元年は曽我兄弟の壮挙一百年祭にあたっていたという。貞重の子、次郎重房の代になって九州に大乱があり、乾元元年大友、少弐、菊池、島津の兵が争剋した時、重房は宗像郡西郷庄に移って飯盛山の守備に当った。それ以来、河津家は宗像郡とは切っても切れない関係を持つに至ったのである。

隆家は祖先の栄光を反省していた。最近の彼は、此の宗像の地を河津家相伝の地として最も相応しい所と考えるようになっていた。

当時、宗像の家臣には深田中務少輔、吉田兵部少輔、吉田伯耆守、許斐左馬太夫、占部大膳進、晴気次郎、石松宮法師などというつわ者がいた。何れも信義に篤い豪勇の士であった。これに対して河津家にも阿野、温科、難波、石津、井原、桑原、深川などという所謂「河津の七人衆」といわれる武士がいた。河津家は今は宗像家の守役ではあるが、事実は数年来の同志であった。隆家は、いま豊州勢が押し寄せたならば、自分は或いは宗像大宮司の下知によって働いてもよいとさえ考えていた。

いつの頃からか、一族の者が宗像の家中に入っている事実は承知の上であった。宗像家が高禄をもって召し抱えた晴気次郎は実は隆家の縁類でもあった。先代の河津隆業の時に豊後の大友義鑑がその勢力を張り出し、隆業の領地に侵入した事があった。隆業はこれに負けてはいられず、かえって在所を斬り返した。大友は大いに怒って部下の立花に河津を討ち果たすべしと命じた。そこで河津は筑前の同志、杉、麻生、宗像等の諸家を語ろうて防戦につとめた。享禄五年九月十九日の戦いには、敵の大将立花親貞は大宮司家の一族宗像新四郎氏延や、大和左衛門尉を味方につけて西郷城に押し寄せた。大宮司家の一族を味方につけるなど、敵にとっては苦肉の計略であったに違いない。河津方にとっては大宮司家の一族を敵に廻しては戦意も揚がるまいと立花が考えたのであろう。立花も卑怯なら、宗像一族の間の勢力争いを敵方内通によって本意を遂げようとした氏延のやり方も汚いものであった。

隆業は自ら太刀を取って渡り合い、ついに直接氏延と渡り合って、その首級をあげた。この時の戦いには敵方の軍将は殆んど討ち取られてしまい、立花勢は全軍が敗走している。

いま隆家の名は掃部允、これは父の隆業がその時の軍功によって大内義隆より下されてより以来相伝のものである。隆家が腰に佩びている「宗吉」の太刀もその時の褒美と聞いている。

一族でさえもその利慾の為には戦場に於て相剋するという世の中に在って、隆家は今の境涯を幸せなものに思っていた。黒川鍋寿丸という人物が将来宗像宮の大宮司として入国するらしい事は、先年来の情報によって承知していた。それを陶の手紙によれば「愈々馳走（味方）肝要に候」といって来ている。本筋は御主君に対する誠忠を促したものに相違ないものと思う。がしかし、九州の状勢の変化によることであれば、彼としては父の隆業のやったように本領守護の為に立働かねばならない。同朋衆である杉、麻生、宗像等の諸衆と相提携することにも変りもあるまい。然らば、何の為の「馳走肝要」なのか。自分がこの今の状態を堅持すればよいのか？とすると、陶殿には何か今は話せぬ別の意図があるかも知れぬ。「鍋寿丸被官の儀云々」の前文だけでは陶の意図ははかり知ることが出来ない。本国山口に何事か起っているのではあるまいか。相良武任などいう奸臣の策動があるやにも聞き及ぶ。（つづく）

（三面よりつづく）

宮田　中村　幸
雨しぶき冷たく舞ひ込むバスセンターに所在なく居て友と会ひたり

田島　白雲　山人
富む家のかなしき乱れ聞く夜はつめたき妙の幸をかみしむ

〃　宇都宮　淳
冬こもる蓑虫の漂揺れて居り薄陽かげらふ窓辺の枝に

宮田　北原きみ子
訪れし家に人居す干されたる白きワイシャツ風に揺れぬて

手光　中村　吾郎
紫枯れたる草おのおのが色もって濡れし河原に朝茜さす

戸畑　花田　道子
あべきつつ道なき道を登り来て五百羅漢の前に静もる

東郷　安部　重郎
稲負ひし牛を牽く子の瞳のつぶら人生の山河男々しく進め

〃　安部　静子
この朝け晩秋の雨しとしと脱穀の塵しづめきよむる

岡垣　早川藤九郎
はじめて見る室戸の岬の灯台にのぼりおなじ岬の観音に参る

戸畑　山磨　昌子
無我の境になって入り行く喫の院に読経の声暗につづけり

福間　瓜生　朝枝
何時の日か嫁きゆく娘の晴姿ゆめに描きて今日も衣縫ふ

福岡　林　まつえ
能古のとまり憶良をしたひゆく友の後姿に長寿を祈る

香椎　桜井　ツ子
山茶花の白き花びら夜べすぎし時雨にぬれて寂けし朝明

〃　桜井　秀
小春日の陽を恋ほしみて立つ樫に連呼かそけし丘越えてゆく

企業に於ける人つくり (六)

出光佐三

外国人はそうはいかないだろうと思います。役人は出勤簿がないと出てこないそうです。私のところはみな始業時の二十分ないし三十分前には必ず出ています。これが日本人の特長です。いわゆる「人の世界」の人のやることで、お前がそうするならはおれも応えようというのです。人生意気に感ず、これが「人の世界」のやることであろうと思います。ところが、この出勤簿については、最近たくさんの銀行や、会社で、その廃止を始めてきたようです。その結果を聞いてみますと、非常に成績がいいそうで、そのため、労働組合のあり方がよくなってきたということも聞いています。日本人はそうすべきものだと思います。「人の世界」ではそうすべきものです。

3　給料を発表しない、残業手当は受け取らない

それから出光では、給料を発表しない。給料で人の働きを評価するなど、人間侮辱である。もし諸君のおでこに金四万円也と書いたらどういうふうになりますか。ただ札が下がっていないだけで、給料を発表しておるということは金何万円也と発表しておることと同じです。こんなことは私のところではやっておりません。それならば給料はなんであるかといえばこれは生活の保障であります。役人は生活の保障であります。私のところは給料を発表しておるというのは、肉体的には苦労しておるかもしれませんが、精神的には愉快に仕事をしておる。これが人生であろうと思うのです。

こうして出勤簿がなくても早く出て、愉快に仕事をしている。適材適所、本人の性格に合ったところに向けて、そして権限を自由に与えて、自由に活動させる。こういうことになっておるわけで、人間を切り売りするような失礼なことはやらない。こういうことなんです。こういうふうにして生活が安定しておりますから、労働基準法によって定まっておるところの時間外手当というものは、社員が辞退して受け取らない。前に一度残業手当を支給したところが、だれも時間外労働をする人がなくなったから、どうしようかと聞いたところが、「私どもは生活は安定しております、そして国家・社会のために仕事をしておるので、なにもカネをもらう理由はありません。残った仕事は家に持って帰ってやっています」と言う。こちから言うようなことを向こうから言われて、その結果、残業手当支給をやめているわけです。こういうことはまちがいなく、たくさんあるのですが、私はこれが日本人の性格に合った行き方じゃないかと思うのです。

4　士魂商才

こういうわけで、人が物に支配されないで、人が物を支配する。ここの区別を今後の若い日本人は体得しなければならないと思うのです。物が人を支配するとなると闘争させられて、やれ資本主義、社会主義、共産主義といって闘うようなことになると思うのです。日本でもいまそういうことをして闘っておるじゃないかというみなさんの疑問がありましょうが、これは明治時代に外国の「物の世界」で、ことに戦争に負けてから、その「物の世界」の思想が極端に強くなったというだけのことなんです。

（つづく）

（写真　中央立って話されているのは出光社長）

外国人はそうはいかないだろうと思います。役人は出勤簿がないと出てこないそうです。私のところはみな始業時の二十分ないし三十分前には必ず出ています。これが日本人の特長です。いわゆる「人の世界」の人のやることで、お前がそうするならはおれも応えようというのです。人生意気に感ず、これが「人の世界」のやることであろうと思います。ところが、この出勤簿については、最近たくさんの銀行や、会社で、その廃止を始めてきたようです。その結果を聞いてみますと、非常に成績がいいそうで、そのため、労働組合のあり方がよくなってきたということも聞いています。日本人はそうすべきものだと思います。「人の世界」ではそうすべきものです。

3　給料を発表しない、残業手当は受け取らない

それから出光では、給料を発表しない。給料で人の働きを評価するなど、人間侮辱である。もし諸君のおでこに金四万円也と書いたらどういうふうになりますか。ただ札が下がっていないだけで、給料を発表しておるということは金何万円也と発表しておることと同じです。こんなことは私のところではやっておりません。それならば給料はなんであるかといえばこれは生活の保障であります。役人は出勤簿がないと出てこないそうです。私のところはみな始業時の二十分ないし三十分前には必ず出ています。これが日本人の特長です。いわゆる「人の世界」の人のやることで、お前がそうするならはおれも応えようというのです。人生意気に感ず、これが「人の世界」のやることであろうと思います。ところが、この出勤簿については、最近たくさんの銀行や、会社で、その廃止を始めてきたようです。その結果を聞いてみますと、非常に成績がいいそうで、そのため、労働組合のあり方がよくなってきたということも聞いています。日本人はそうすべきものだと思います。「人の世界」ではそうすべきものです。

4　士魂商才

こういうわけで、人が物に支配されないで、人が物を支配する。ここの区別を今後の若い日本人は体得しなければならないと思うのです。物が人を支配するとなると闘争させられて、やれ資本主義、社会主義、共産主義といって闘うようなことになると思うのです。日本でもいまそういうことをして闘っておるじゃないかというみなさんの疑問がありましょうが、これは明治時代に外国の「物の世界」で、ことに戦争に負けてから、その「物の世界」の思想が極端に強くなったというだけのことなんです。

（つづく）

神詣でのあれこれ

片岡道信

今月よりここに掲載する「神詣でのあれこれ」は、片岡道信氏の御寄見である。

ここに述べておられる神社資料は単なるテキストからの引き写しではない。其半生を費やして、大社小社を単念に歴訪し、自らその目で確かめた体験記なのである。氏は現八幡港運監査役（前社長）の重責にあり且当社賞任役員でもある。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

ここに述べておられる神社資料は単なるテキストからの引き写しではない。其半生を費やして、大社小社を単念に歴訪し、自らその目で確かめた体験記なのである。氏は現八幡港運監査役（前社長）の重責にあり且当社賞任役員でもある。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

今月よりここに掲載する「神詣でのあれこれ」は、片岡道信氏の御寄見である。

ここに述べておられる神社資料は単なるテキストからの引き写しではない。其半生を費やして、大社小社を単念に歴訪し、自らその目で確かめた体験記なのである。氏は現八幡港運監査役（前社長）の重責にあり且当社賞任役員でもある。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深い信仰の泉から湧き出ていたのである。

多忙の身にありながら、本誌に特に執筆して下さった事を感謝するものである。

八幡港運の社是の根本は「この深

宗像藪庵先生百話

スマトラの衛生的土俗 (六)

宗像太郎坊

東印度のフルウあたりの一部では、少年が割礼をしたあとのペニスを母親が口に含んで労り、切り取った包皮を同年輩ぐらいの女の子のいる家の後に埋めておくという風習がある。

アフリカのナンデイ族の少年達は、四年半毎に行われる割礼の式に、一度は参加しなければならない。この日は前々からわかっているので、年頃の少年は其の日の来るのを半ば恐怖心と、半ば喜びの情とで待ち構えている。然もこの日、一緒に式にのぞんだ者は一生親戚つき合いをするというから一層大切な日である。

少年達が何故喜ぶかというと、割礼を受けると始めて男になる。嫁を貰う資格が生れるからだ。丁度バタ族が歯を削ると結婚の資格ができると同じである。

日本でも縄文時代に歯を抜いたり或は、叉状研歯にしたりした事が証明されている。愛知県渥美郡渥美町伊川津で発見された人骨にこの叉状研歯が認められている。

扨、割礼前日の夕方になると、大勢の人達が神前に集って一大タンスバーテーが開かれる。いわゆる土人踊りが始まる。これには一切、女人禁制で、男ばかりの踊である。而も割礼を受けない少年は男子の側に加わってはいけない。彼は女装して女として出席し、大人の男達の間に伍して、女として踊りの相手をする。

翌朝早く少年達を連れて河へ行き躰のあかをよく落す。殊にペニスをよく洗い、スメグマを落す。すでに森の中の式場には、大勢の男達が盛んに火を焚いて待っている。少年達が集ると、一番長の老人が進み出て、一人一人に質問する。「お前はこれ迄、女と関係した事はないか」、大低の者は「ありません」と答えると、「其の女は誰ある」と答えると、「其の女は誰か、名を云え」と、名を白状させられる。この間、男達の間では緊張が緩むが、もし相手の女が未婚の場合はよいが、人妻の場合は、それを聞いた夫は飛んで家に帰り、妻を袋叩きにし、殺たりする事もある。だから賢い人妻は、前もって相手の少年に菓子を与えたりして「ね、あれを云っちゃいけないよ」と念を押しておく。

質問が終ると割礼実施である。焚火の中には鑿に似た細い鉄の棒が真赤に焼かれている。日頃は牛に焼印をつけるための火箸様の鉄棒である。さっきの老人がこの焼け鉄棒をとって、台の上に仰向けに寝ている少年のペニスから包皮を吹きつぎと焼き切ってゆく。この時に泣いたりすると神を怒れぬ失礼者として厳罰をうける（槍で突き殺される）から、脂汗を流して辛抱している。傷には牛の脂を塗っておく。地面に落ちた包皮は血によごれた土と一緒に掻き集められて一緒に葬られてしまう。これが済むと少年達は「メンジェート」（少年小屋）と呼ばれる特殊の離れ小屋に隔離されて三カ月から六カ月の間、傷が完全に治りきるまで、一切、人との交渉が禁じられる。特に女の姿を見たり、女の話をしたりする事は厳禁されており、もし女と逢ったりしたら、直にペニスが腐れ落ちると信じられている。傷が治って自宅に引上げる時は凱旋将軍である。

その日は又、一大タンスバーテー。少女の方は何つかとこうと小陰唇を切りとられてしまう。これはひどい手術であるが、後は返って性感を増している。

（以下次号）

（右写真はトバ湖バタック族の家屋）

日本の民主々義

戦前の場合（その二）

天野健一

兵庫県加古川の漁夫西田彦蔵は、十六才の時漁に出て難船し、漂流中をアメリカ汽船オークランド号に救われ、其侵彼地に渡り帰化して名もジョセフヒコと名乗って洗練されたアメリカ紳士となって、明治五年帰国した。政府は彼を長崎通事として採用した。彼はアメリカには政治の基本となるコンスチチューション「憲法」と云うものがある事を説いた。木戸は特にこのコンスチチューションに注意した。そして彦蔵からデモクラシーに対する指導を受けた。何しろ我国民にとっては異常の事であり、木戸は心的革命を起すほど此の憲法に留意した。されば木戸の政治的思想は、一歩も二歩も前進して居たのである。

亦伊藤は此の前後二カ年に亘り、欧洲を視察し、特に独逸に憲法の創案を纏めて帰国したが、その云う処は「君主国は君権を明らかにせしむるにある。この君権の完全なものでないのは名は君主国であっても其和主義と混同するものである。故に憲法を立て、国会を開いても君権を離するわけでもなく、君主は憲法の上に在る」即ち伊藤式ビコマルク式憲法である。大体憲法には二つあって君主が作った憲法を欽定憲法と云い、人民が作った憲法を民約憲法と云う。明治憲法は欽定憲法であり、現憲法は民約憲法である。この憲法の骨子は大きく分って三つの柱からなって居る。一つは主権在民、二つは戦争の放棄、三つは基本的民権の鮮明化、即ち人権の尊重である。

話は前に戻るが、秘密の中に起草されていた為、新しく生れ出づる憲法に対しては、民間人は只憧憬する丈であった。それのみならず、伊藤内閣の弾圧政策が生み出した政治的反動であった。此の過激派の一群をさして壮士と云った。彼等は貴顕紳士でも内閣人のところへでも押しかけた。伊藤博文、山県有朋、三条実美、何処へでも面会の強要をした。時も時中欧の天地を吹きまくった革命の暴風はビストル爆弾によって血の行動が繰り展げられた。特に旧ロシアのアレキサンドル皇帝の爆殺は彼等にとって一層の刺激となって大隈外相に爆弾投じた。来島恒喜等政府卿暗殺運動は遂に高田事件、福島事件、群馬事件、名古屋事件、大阪事件等、明治二十三年を待ち切れず、過激な手段に出て、幾多の血の斗争を繰りなしたのである。大阪事件には景山英子と云う女流民権家も交って活躍したが遂に彼女は捕えられて入獄の浮目を見た。英子は後に福田姓を名乗ったが、女性としては仲々の女傑で、又情熱家だった。彼女は「妾の半生」「続妾の半生」を著した。五十を過ぎて「若人と恋は御身等の専有物ならず、五十路の恋の深さを知らずや」と若人に抗議して居る。此等血の斗争を歴史は称して流血の九年間と呼んでいる。

明治二十三年の国会開設は民間人にはのろい感であった。足掛け九年間の久しきに亘って論議する必要はない。由来官僚の仕事は緩漫である。緩漫にも程があると云うので不安と焦燥にかられてじっと我慢して居たがこれが何時まで続く筈はない、言論は抑えられ、行動は封ぜられ進むも退く事も出来なかった、民人は暴力行為も辞する処でないと勢だった。

☆……

☆……